知的障害のある人のグループホームにおける支援構造研究Ⅲ

中野　敏子　　安藤　まみ
浅沼　太郎　　相澤　美樹

１．はじめに

１）これまでの研究視角

本研究は、知的障害のある人の地域生活に必要な「支援」の基礎的研究である。2001年度より、「知的障害のある人のグループホームにおける支援構造研究」として継続的に研究を進めてきた(1)。本報告では、継続的研究として得られた成果とともに、これまでの３年間にわたる研究成果を整理し、そこから導き出される「支援構造」基礎研究としての新たな視角を提示する。なお、ここでの支援構造とは、その人の日常的な生活行為をその人の望むかたちで継続するように求めに応じて介入する行為（支援）と、それを支える構成要素の関係構造をいう。利用者と支援者によって、相互に創造形成され、機能化するものと捉える。

本研究を継続する過程で、知的障害のある人の支援の基盤である財源、法的枠組みなど制度変化が起きている。介護保険制度との統合論議から始まり、このところの支援費制度の利用増加に着目した財源不足をめぐる論調は、知的障害のある人の福祉サービスに限らず、障害者福祉サービス体系全体を改編の途(2)へと加速させてきた。知的障害のある人の生活支援の前提には、「地域生活」という支援範疇をより明確に概念化していかなくてはならない状況がある。そこには、「施設」中心の支援枠組みではないアンチテーゼとしての支援の模索がある。残念ながら今のところ、財源枠組を含めて、「地域生活」支援は具体的に利用者が見えやすい状況で準備されているとは言い難い。本研究の中核として位置づけているグループホームという支援サービス形態も、国として制度化（1989年）されて十数年が経つが、未だに「地域生活」支援の一つの模索にすぎないといえる。グループホームという支援形態が不安定な状況として存在する要因には、住む人の所得保障、住宅手当、そして、支援する人を確保するための財源確保など、財源問題を抜きには語れないことも事実といえる。しかしながら、財源的な枠組論が、一人ひとりの知的障害のある人の尊厳ある生活を保障するための具体的な支援内容を提供するという面で、直接的な答えを出すという意味からは十分ではない。とくに、その人にとっての生活の暮らしやすさを実現するには多くの工夫が必要な場合がある。言い換えると、その人一人で対応することがむずかしく、時間的な長さからも、また、関わりの質の深さからも十分な他者からの支援を必要としている人たちへ、これまでの「グループホーム」という支援形態が何を提供しうるか検証し、日本における支援の具体的な手がかりを提示する必要があるといえる。

２）研究の目的

すでにこれまでの研究でも指摘したように、日本での先行研究の分析枠組では、グループホー

ム制度に基づく支援者が提供する業務内容を通して、バックアップ機能の運営管理の側面からアプローチするという視角が主流といえる。本研究は、日常的な生活がその人の望むかたちで継続するために、グループホームの居住者と支援者の両者によって相互に創造形成される「支援」を質的に把握し、グループホームの支援構造を明らかにしようとするものである。

今回は、とくに前年度実施した「居住者と支援者の相互作用」に焦点をあてた英国・ウェールズで開発された「アクティブサポートモデル」の支援構造分析から導き出した比較検証の柱[3]をもとに、日本における支援関係の検証を行うことに焦点をあてた。

アクティブサポートモデルにおける特徴から、比較検証の柱として次の4点を捉えた[4]。

(1) 本人の「能力」ではなく、「相互作用」という支援の量に着目し、日々の活動に関わる機会を積極的に創出することで「参加」を実現する。

(2) 支援者はライフコースを意識して支援する。

(3) 居住者と支援者との二者関係に、社会とのつながりを普通の生活には不可欠なものとして位置づけるための関係を広げる視点と方法が、重層的に支援構造に組み込まれている。

(4) 生活の質をチェックする具体的な7つの指標（普通の生活を構成する基本要素：①地域社会の一員であること、②豊かな人間関係、③継続的人間関係、④経験と生活する力を伸ばすための機会、⑤自分の人生について自分で決定すること、⑥価値ある役割をもち尊重されること、⑦ひとりの人間として扱われること）がある。

いわば、これらの諸点が「支援の中心」に据えられた要素といえる。

一方、これまでわれわれが実施した日本におけるグループホーム支援の調査からは、①何らかのやりとりが行なわれながら営まれる生活、②日常性のなかに生じる生活のしづらさ、③生活し続けるという時間の継続性とその人独自の道筋、④生活しやすいように構造化された居場所、という視点が導き出された。これらの点にさらに考察を加えるにあたって、前述したアクティブサポートモデルから導き出された4点にわたる比較検証の柱の文脈からはどのように支援を位置づけているかを明らかにすることで、日本のグループホームで展開される支援構造の把握を深めることができると考える。

（中野　敏子）

2．研究の視点と方法

グループホーム居住者の生活において支援者が介入する行為は、具体的にどのような関係を創っているか、そして両者の相互関係は一人ひとり（居住者）の豊かな暮らしを保障するものになっているだろうか。我々は「地域生活」支援の質的な担保という観点から、グループホームという場で支援構造を探ってきた。そこでは、前述したように、仮説的に提示したグループホーム調査から導き出した4つの視点は、どう具体的に「支援」として提供されているかに着目して、日本のグループホーム支援者への調査を行った。支援者が自身の仕事をどのように捉えているかを踏まえ、インタビューデータをもとに支援の中心に据えていること、そして支援（構造）の特徴を把握しようと試みた。

日本のグループホーム実践における支援構造を明らかにするため、調査ではさらに「アクティブサポートモデル」を分析軸に用いた。その理由として、同モデルが(1)居住者による日々の活動への積極的な「参加」を中心に据えて、生活の質に係わる前述の7つの指標を提示するなど、実践の理論的な視点が明確なこと、(2)実践理念（「参加」を生み出すこと）を具現化する実践モ

デルがあること（日々の活動と支援計画）、(3)支援者がどのように関わればよいかアプローチの具体例が示されていることの三点が挙げられる。いずれも日本における支援構造として、居住者にとって望ましい生活を支えていくための視点、生活の質を高めるような取り組み、そして具体的な関わり方を検討していく上で、同モデルが提示する枠組みは示唆に富むと考える。

調査方法は、次の通りである。同モデルを紹介したビデオ（23分間）(5)を見た後、調査者からビデオ内容の流れを確認する意味で補足説明を行う。その後、グループホーム支援者（一回につき４，５名から、約５名を小グループとした30名規模も含む）に約１時間のグループインタビューを実施した。質問項目は「日頃の実践で利用者との関係をどのようにつくっているか」「支援の中心に何を据えているか」の二点である。

なお協力いただいた回答者は、直接的な支援者（いわゆる世話人）が主で、他にバックアップ担当の職員が同席した。

調査対象は次の５ヶ所で、プリテストを①で実施した。調査対象は運営形態の違いを考慮して調査協力の依頼をし、協力が得られたグループホームで実施した。運営形態の違いによる比較研究も視野にいれているが、詳しい分析は今後の報告としたい。

（調査対象）

① 通所施設がバックアップするグループホーム（中・四国農村部）

② 通所施設がバックアップするグループホーム（関東都市部）

③ 入所施設がバックアップするグループホーム（関東都市部）

④ 運営委員会方式による（バックアップ施設を持たない）グループホーム（関東都市部）

⑤ NPO 法人によるグループホーム（関西都市部）

調査期間は、2003年８月から2004年７月(6)までである。

分析には許可を得て録音したインタビューの逐語記録を用い、インタビュー者のフィールドノート、メモを含めて、質問項目に沿って分析を加えた。

なお、倫理的配慮として次の点に留意した。本研究は支援を必要とするグループホームの利用者とその支援者の支援関係という、個人の生活支援に深く関わるなかで成り立つものである。したがって、インタビューの過程、リライト段階、考察段階という一連の研究過程において、情報収集における了解をとること、個人のプライバシー保護・尊重には特段の配慮を行った。また、研究報告書作成においても、特定の個人が想定されないように十分に配慮した。

（淺沼 太郎）

３．研究結果と考察

１）アクティブサポートモデルとの差異が示すもの

ビデオの内容への意見では、日頃のグループホームの仕事との違いについて感じたことを述べたもの、または、生活の場で意図的に働きかけることへの疑問が多かった。アクティブサポートモデルとの比較を通して、普段の実践との違いに着目する意味、生活の場で「何か」をすることへの抵抗感が示すものは何だろうか。まずこのことを考えることで、日本の支援構造を紐解く手がかりとしたい。（以下、逐語記録からの抜粋を斜体で記す。また括弧内は調査者による内容の補足である。）

・違うから…ほら彼たち（ビデオ）は一緒に、たとえば食事でもなんでも、ご飯を作って食べさせるというのが目的ではなくて、要はそれに一緒に参加する

ことなんでしょ、彼らたちは。私たちはそうじゃないわけですよね、今は。だからその目的が違うわけですよね。

- *個別支援というけど全く違うんですね。視点が違うということで「この人は洗濯が出来る」「薬が飲める」というレベルとは違う。*
- *もう少し待てば、利用者側から行動が出るのではないかと思った場面が何点かあった。普通の生活って何なのだろうと改めて考えさせられた。*
- *支援者が計画して働きかけることが、生活の場で必要なのか疑問だ。*

国のグループホーム制度が規定する「食事提供」などの業務、そして ADL 面に着目した「できるように」という実践の視点からは、アクティブサポートモデルは違和感をもって捉えられた。そこには支援者自身による仕事の捉え方、居住者という人への見方、相互関係のあり方（グループホームでの生活を形成するものとして）へのイメージなどが絡み合って、影響をあたえていると考えられる。「その目的が違う」という発言からは、バックアップ施設が支援者に何を仕事として提示しているかも検討すべき課題であることが分かる。

また「もう少し待てば」と感じる場面で、支援者からの具体的な行為として、あえて「何かをする」必要はないと考えるとき、そのかわりに提供される支援は何であるのか興味深い。アクティブサポートモデルは「普通の生活」を構成する 7 つの基本要素を示したが、日本ではどこに着目して支援を展開しているのか、それを生活場面における「見守り」と表現するにとどまらず、質的な内容について明らかにする必要がある。そこには日常生活に自身が関わる機会が制限されがちな、障害が重度とされる人(7)のニーズを、どのように生活に反映させているかという課題も含まれる。以下では、これらの点を検討していきたい。

2）支援の中心に据えていること

今回のインタビュー調査を通して、グループホームにおいて支援者が大切だと感じることは、居住者と支援者の日頃の付き合い、両者の関係を基盤にしていることが伺われた。これは「何らかのやりとり」を積み重ねる日常として、あるいは「時間の継続性」のなかでその人を見ていくという、前回の調査結果（中野他2003）と重なる結果である。今回は加えて、支援者が生活を支える技術を試行錯誤していること、特に支援者自身の生活経験を背景にして関わりを工夫している点が示唆された。

- *だんだん付き合っていく中でね、こういうことがあった、ああいうことがあったっていう過去のことをまた何回もご両親から聞いたりとか本人からポロッと聞いたりとか、そういうのをパズルみたいに組み立てていって「じゃあ、また今日もこういうことがあったんじゃないか」とかって、そういう感じですね。本当に手探りで…。*
- *自然にいろいろやってしまっているっていうところなんですけども、常にあるっていうところで…やっぱり日常生活に何が起きているかはわからない。やっぱりその方を見て…変な表情をしたりとか、黙ってしまったりという感じだったら、「ああ、ここは言い過ぎたかな」というところでその日は終わるんですけど、また次の日に同じことがあったら、「ここは出ちゃたぶんいけないんだな」っていうのがわかる。身に染みるというか体に染みているので、「今日はここで本人が何か言ってくるのを待とうかな」とか、そういう…*
- *（居住者が）嬉しそうな顔をした時なんかは、もうこっちがね、その喜んでくれる笑顔に救われるっていうのかしらねえ…。まあ（支援者自身は）二児の母親でね、もう孫もいる年齢だから何となくね、その感情というか気持の部分が何となくね。自分の子*

供と同じぐらいの男の子がいるとね、何となくだぶるんだよ私の場合。

・*出来ない、出来ないって私たちは思ってたんですけど、やはり結婚してからなんですね。それで彼女の方がやっぱり一緒にお勝手に立ってやってたのを覚えたんですけど。それからお味噌汁なんかは奥さんが帰ってくるのに自分の方が帰りが早いから作るんですよ。そしてわからないから、煮立ったお湯に…ポットに入れてお味噌汁入れて…「あっ、それは違った、教えないで悪かったね。これはお水から入れるんだよ。」って言ったら、今は「これはこうする」と一応聞くようになって、一応お味噌汁はほとんど自分で出来るようになりました。*

支援者の捉える生活を支える技術とは、居住者や家族との関係をもとに日々の積み重ねのなかで熟成されていくもので、それを暮らしの中にどう落とし込んでいくか摸索する姿があった。日常的に起こる様々なことに対し、過去の出来事をもとに現在の状況を把握しながら、様々な働きかけが行なわれていると言えよう。また、グループホームの業務内容として提示された「家事」や「話し相手」と実際の仕事は「違う」「そんなものではない」と支援者は感じていた。その内容について明確に述べられることは少なく、「自然にいろいろ」「（支援者の）体に染みている」などの感覚的な表現が取られていた。

さらに「パズルみたいに組み立てる」視点には、支援者の「生きてきた経験」が背景にあることが推察された。例えば、毎日お風呂に入ること、コーヒーに入れるお砂糖の量、テレビをみる時間の長さ、休日の過ごし方など、支援者のもつ価値が影響をあたえやすいと話すバックアップの支援者もいた。特に、子育てを終えた主婦層の支援者にとって、生活のなかで拠り所とするものは自身の子どもとの関係にあると答える人が多かった。

他にグループインタビューで特徴的だったのは、調査者から「関係の築き方」を問いかける過程で、「そう聞かれると、こうかもしれない」という文脈で語られることだった。支援者にとって居住者との関係の一つひとつが、明確には意識化されていないことを示している。同時に、味噌汁の作り方を伝える関係のように、生活のなかで必要なことを自然と身につけるような働きかけが行なわれている。こういったグループホームでは、穏やかに時と場を共有する共同体のような関わりが想定されており、調査対象の多くに共通する「雰囲気」があった。この点について、はじめに述べた「施設」中心ではないアンチテーゼとしての支援から議論を一歩進める手がかりになるのではないだろうか。

3）居住者に合った支援の提供

支援者は居住者の生活をどのように考えているか、一人ひとりに合った支援をどう提供しているか、支援者の語りからグループホームによって多様な状況にあることが明らかになった。バックアップ機能を担うところのサービス形態や運営方針を含めて検討すべきところだが、今回はそれぞれの特徴を記すにとどめたい。

アクティブサポートモデルの一部（活動と支援計画）[8]を取り入れて、グループホーム実践を行なっているところからは、居住者に対し意識的に働きかけることへの戸惑いが語られた。試行錯誤の取り組みの中からは、日常生活のどこにポイントを置いて関係を築いていくのか、支援者の直面する課題が見受けられる。「（居住者を計画に）当てはめてしまう」「やらせるだけ」「生きていく上で大切なこと」などの言葉からは、居住者にとっての日常的な生活行為に係わる意味を探していることが伺える。例えば、洗濯物たたみやお風呂の水をはる、ホーム

の買い物など、ある人に役割をもってもらおうとする働きかけが、一歩間違えると管理的な性格を帯びることもある（暮らし方と乖離した「当番」など）。居住者にとっての地域生活として、何を軸に具体的な支援内容を整えていく必要があるのか、不明確な現状を示唆している。

・そうですね…またやらせるだけなんじゃないかということは常に思う時があるんですけど、でも自分が生きていく上で、その洗濯物を取り入れたり、洗濯をしたりっていうことも、やはり大切なのかなって思うこともありますし。

・今まですごく感覚的にやっていたところを、たとえば7時にご飯を食べるとか決めていても前後もするし、そういうのをすごく意識しながら見れるようになったというのがまず一つ大きいですね。でもやっぱり、どうしても当てはめてしまうところもあるし、逆にあれも出来る、これも出来ると思って、それを「次にこれ、次にあれ」と言ってメンバーがしんどくなるとか、何かその、行きつ戻りつというか、その中でどういう形でしたらいいのかなと思いながら。

ガイドヘルパーなどを活用し、積極的に地域での実践を展開してきたグループホームでは、居住者の余暇活動と日常生活のバランスが大切だという意見が述べられた。障害のある人としてではなく、ひとりの人として認められる消費者としての社会参加の重要性と同時に、日々の生活をどう固めていくか、「身近な生活の中で」の課題である。一般的に支援者の意識として、余暇や日中活動・就労といった住居の外での活動は社会参加と結びつきやすいが、住居内の日常的な活動について、あまり意識はされていないと言える。これには、グループホーム支援者の仕事が、日中活動を支えるための家事を中心として、補完的に位置づけられてきたことも影響しているだろう。換言すれば、グループホームの成立過程を振り返ると、世話人の支援は社会一般の認識からすると社会的生産価値と結びつきやすい就労支援を補完的に支えるものとして位置づけられた。結果として、「家事労働」の社会的評価の低さが「家事労働」に特化されたようにみえるグループホームにおける支援の評価を低めることにもなってきたといえよう。

・私たちは社会参加ということ、一人の人として見る、普通に消費者として出て行くことのほうが非常に手っ取り早いというか。やっぱり現実に日々の仕事とか日々の生活の中でもない、人として認められるということがね、自尊心という意味ではね、非常に大切なわけですから。ただ、あまりにも広げ過ぎで、もっと身近な生活の中でやはり何とかしないと。そんなに毎日が晴れの日でね毎日ご馳走食べてではね、ちょっとそれは落ち着かないだろうというところでね、逆に不満も高くなりますよね。

アクティブサポートモデルの提起する実践モデルとアプローチの方法を受けて、日々の関わりと共通する点を指摘する意見があった。前回の我々の調査結果を用いて述べれば、居住者の「生活のしづらさ」をグループホームという支援を提供する環境に捉え、「生活しやすいように構造化」する働きかけである。例えば2階に居る居住者に、言葉ではなく他の音で「ご飯ですよ」と伝えるという。居住者にとって生活を送る関係をつくりやすい方法、その環境をどう保障できるかという視点がある。自閉症という障害特性の捉え方が、意思の表現が限られているといった見方だけではないことが分かる。すなわち、そこには居住者と支援者、相互によって形成される関係があり、場面場面での関わり（支援）が豊かな暮らしを紡ぐ糸になるという見方もできる。

さらに、直接的には居住者と支援者の関係が

媒介となりながらも、それを支える構成要素とのつながりに広げて、支援を捉えていく視点を示唆していた。主体的に生活を築くために、「主体的なことがどこから生まれるのか」検討する姿勢からは次のことが推察される。居住者の望む生活について、その人を中心にした関係から捉えるには、関係者との協議が欠かせないし、主体的な相互関係への働きかけは支援者同士の連携が必要になる。バックアップ機能をもつグループホームであれば、その評価や計画化を通してさらに支援が意識化されていくだろう。特に、グループホームの支援にホームヘルパーやガイドヘルパーが係わるなど、複数のサービス提供者が入るにあたっては基盤となる支援構造の明確化が欠かせない。

・*いわゆる自閉症の人に何が要るかという視点、何か教える時に自閉症ということの障害特性を考えて教えたかということをもうちょっと確認して、こういう教え方を…言葉で言ってもわからないので、たぶんプロンプトという場面の中身はもっと細かいですよね皆。その意味では種類というか、こちらの働きかけの視点が…。たとえば声かけで「ご飯ですよ」というのを、他の音でわかりやすくしている。*

・*いかに自分（居住者）から取り組めるかっていうものがあるので、そのきっかけを出来るだけ…（支援者から言葉以外の方法でつくるか）*

・*ご本人たちがどう主体的に生活していただけるかっていうことがまずベース。それはだからアクティブサポートモデルと同じなんですね。ただ、主体的にっていう時に、主体的なことがどこから生まれるのかっていったら、それは難しい問題だと思うんですよね。ご本人が言うことが本当に希望なのかどうなのかっていうのがわかりづらいし、それを全部聞き入れた時に、生活自体がどうなるかっていうことに関係するから難しくなる。そこをやっぱり関係者の、親御さん、それからご本人を含めた関係者とどう協議していくかっていうことがまずベースなんですね。*

（淺沼 太郎）

4）サポート体制の支援への影響

障害者グループホームに関する先行研究の中で、バックアップ施設による支援の役割は大きいといわれてきた。逐語記録分析から、様々なサービスやバックアップ等のサポート体制が、支援者の日常的な支援のあり方に影響を与えていることが伺えた。今回の調査では断片的ではあるが、運営形態やサポート体制の特徴が与える影響を見出すことができた。

以下は、通所、入所の施設を運営する社会福祉法人がバックアップする、グループホーム支援者の語りである。この法人は他にも、地域にいくつかの作業所を運営している。法人の理念として地域生活支援を「仕事」「生活」「余暇」という3つの領域からとらえ、一人一人が地域生活を実現していく上で欠くことのできないものと位置づけている。次の逐語記録からは、支援者は、グループホームでの支援を3つの領域の「生活」部分として捉えていることがわかる。バックアップを担当する法人が、「生活」をどのように捉えているかも重要といえる。それは、社会との接点に何を見いだすかに連動するものであり、グループホームに暮らすひとり一人の支援を特徴づけるものにもなる。

また、法人のグループホームには、統括責任者1名がおり、全てのグループホーム支援者の相談、調整に当たっている。また、グループホームを地域ごとに2つのグループに分け、それぞれに、複数のグループホームへのサポートを行うベテランのスタッフ（主任）が配置されている。このようなチームでの実践から、支援の基本的な捉え方は、グループホームの全スタッフへ浸透しやすい状況を作り出していることが推測された。

・*私達は生活、余暇、職業というふうに立てていて、グループホームっていうのは、生活っていうことをとてもメインに考えているんですよね。この施設の入所もそうなんですけど、やっぱり夜の生活、昼の職業ということを分けて考えちゃっているんで、だから何もすることがない時間もあっていいんじゃないっていうところも別にあるんですね。…比較的、生活って本人が職業、たとえば余っていて、それがかえってリラックスして、なるべく安心してゆっくり暮らしてもらいましょうというところがわりと強いので、そこは少しやっぱり見る期間を、見ていく考え方…だからやっぱり普段はとにかく落ち着いて安心して、そこでリラックスして生活していくことも結構メインにしているので。*

また、通所施設のバックアップするグループホーム支援者の語りからは、直接的な支援者（世話人）の仕事内容をバックアップ担当者がどのように規定するか、その関係がもつ重要性を示していた。必ずしも社会福祉の専門教育を受けていないスタッフが各グループホームの「世話人」として働いているこのグループホームでは、統括責任者（１名）の役割は大きいと言える。このインタビュー場面では、「家事的なことはほとんど自分で行うことが出来るが、コミュニケーションを取ることが難しい入居者」に対して、同じ空間で「なにもしない」で過ごすことのつらさを語り、居住者の生活の内容（スケジュール）を組み立てる部分は、統括責任者に担って欲しいという希望が語られている。例えば、ホームの中で新しいことを始める時や入居者の生活上のトラブルに対応しなければならない時などは、バックアップとしての統括責任者の指示を基に支援を行っていくことをスタッフは求めているということが言えるであろう。

同時に、バックアップ側から支援の内容について提示されれば、「出来るかもしれない」と意欲を見せていた。このことから、日々の支援者の仕事が何のために行われ、具体的にどうすればよいのか、その位置づけが大切であると思われる。「バックアップ」の実質的な役割を考えるとき、直接的な支援者自身のスキルアップをはかっていく、あるいは支援者それぞれの個性を活かしながらバックアップが発達していくのか、何をもって「バックアップ」とするかなどの課題がみえる。支援の具体的な方法、たとえば、特に困ったとき、インタビューで語られているようにスケジュールなど何らかの実践モデルを提示してもらうことが求められてもいる。その意味ではバックアップ施設はそうした具体的な方法を提示しきれていないといえる。

・*私が説教するんじゃなくて、たとえば上の人がね、ある程度Aさんの意向を聞いて、自分の趣味を生かして、「こういうことがしたい、ああいうことがしたい」というのでスケジュールを組んでくれて、それで世話人の方に、まあ朝の何時間とかお昼食べた後の何時間をこういうことをしようとか、ある程度そうやって話し合いの上でスケジュールを組んでくれて動くんだったら出来るかもしれない。だからもちろん利用する人たちの意向を聞いてスケジュールを組んでくれたら、それに対して、たとえば1週間のうちにあるいは週に2回～3回ぐらいそういうことをしたいっていうふうに希望があったとしますよね。そしたらそれに合うようにやるとかね、それは出来ると思うんですよ。*

以下は、NPO 法人の運営するグループホームである。

このグループホームでは、居住者は生活の中で個別にホームヘルパーを利用している。グループホームを運営する NPO 法人でもヘルパー派遣事業を行っているため、居住者の利用率は高い。従って、個別にヘルパーが入っている時間

には、居住者とグループホーム支援者のかかわりは少ないため、生活の中で居住者の様子が掴みにくいようであった。このような状況の中で「二人話」という時間は、スタッフが入居者と一対一で話す「やりとり」の場面を生活の中に組み込むための工夫であると言える。それがどのような意味としてその居住者の生活に位置づけられるか深める必要がある。

ヘルパーの利用は、入居者本人が個別に生活を組み立てていくことが可能になるが、グループホームの支援者と時間を一緒に過ごすことが少なくなること、また、ヘルパーとの支援の共有が難しい面が在るといえる。支援の意識化，構造化をはかっていくための課題は何か。まだ、地域生活を支えるホームヘルパー等のサービス提供者と連携して、居住者との関わりをつくるには至っていない。

・*あっ、いえ…やっぱ個別にヘルパーさんに入ってもらっていたら、そのヘルパーさんは、自室でゆっくり過ごされたり、掃除したりとか個別に関わる時間がヘルパーさんは多くなってきているんですけど、逆にスタッフの方が個別にゆっくり部屋で過ごす時間というのが、なかなか取れなくなってきたなあというのもあったので、ちょっとこちらが意識的に取りたいというので、「二人話しよう」という感じで、「部屋に遊びに行かせて」みたいな感じで…ね。*

・*どうしても世話人が感覚的にずっとこうやっていて、それでヘルパーさんが全然違う事業所から来ているということがあって、なかなかどうしてもよその人というのがあって、世話人さんとグループホームと一緒になっているところだから、いろんなことを考えたいけど、向こうは向こうの都合でヘルパー来ているみたいなところがあって、僕らは僕らの都合があるし、そういうところがあって、なかなか世話人とヘルパーというのが溝がなかなか…。今回も、まあこういうのを導入した…まあ僕らがやると言っても、ヘルパーさんにとったら、いろいろわかってないということでは、やっぱり…。*

（安藤まみ、相澤美樹）

4．まとめと課題

1）アクティブサポートモデルを比較軸とした「支援の柱」の受け止め方

まず、アクティブサポートモデル分析から導き出された「支援の中心」となる要素が、インタビューを通して、日本の支援者にはつぎのような受け止め方として把握できた。

第一に、「積極的な活動支援」の側面では、「居住者に対し意識的に働きかけることへの戸惑い」や日常生活のどこにポイントを置いて関係を築いて行くのか意識化されてはいないなど、支援者の直面する課題が見受けられた。したがって、第二の「ライフコースを意識した支援」に関しても積極的に「意識化」「共有化」されているところまではいたっていないといえる。第三の「居住者と支援者との二者関係をもとにどのような社会とのつながりをつくるか」は、一般的に支援者の意識として、余暇や日中活動・就労といった住居の外での活動は社会参加と結びつきやすいが、住居内の日常的な活動について、あまり意識はされていないと言える。第四に「生活の質をチェックする具体的な指標」に関して具体的に確立しているという状況にはないといえる。しかし、バックアップ機能が組織的に取り組まれる場合、支援者への支援内容をチェックする機能が存在することによって支援内容に効果をもたらす可能性は見えた。

2）支援の創出と「意識化」「共有化」

①日頃の実践で利用者との関係をどのようにつくっているか、②支援の中心に何を据えているか、の２点をインタビューガイドとして、アクティブサポートモデルから導き出した特徴点

を支援軸として捉えてみるという、グループホーム関係者に自らの実践を振り返る機会を設けた。このことから、日本でのグループホームにおける支援を通して、「支援者と居住者が創出する支援」場面では、それぞれの支援者（世話人）が設定された「業務」以外の視点から支援を創出しようとしていることは明らかになった。しかし、個別支援についても、体系だった流れからそれを位置づけようというよりも、むしろ散発的な「対応」のレベルといえよう。したがって、それらの支援の創出が「意識化」、「共有化」に至らないために、質的に担保できる支援構造として位置づけられていないことも明らかである。「意識化」「共有化」へのプロセスとしては実践を「評価」する機会が必要と考える。そこでのバックアップ機能に何が求められるか明らかにする必要があろう。

3）評価を受ける機会と実践モデルを生み出す機会

実践の評価の機会が「研修」というかたちで提供されているが、支援の基本的な視点が明確にされないままに百家争鳴の様相で研修が実施されているだけでは、いわゆる実践モデルまでには至らないのではないだろうか。地域生活支援として、これまでの「施設中心」の支援展開とどこが異なる支援であるかを問われる今日、グループホームにおける支援という実践を通して、改めて、実践の積み上げと実践のモデル化、さらには実践理論への流れの道筋を明らかにすることが必要といえる。その意味から、「評価をうける機会」をどのように組み立てていくかを見通し、包括的な支援構造を改めて検討する必要性が確認される。

4）居住者と支援者が創出する支援関係のバックアップ機能

そこで、日本のグループホームサービス形態で位置づけられている「バックアップ機能」に再度着目したい。グループホームの業務について、従来のような「食事提供」「人間関係調整」「代替要員」等といった規定ではない、居住者との関係の中で支援者は何を支援の中心に置いていくことになるのか、その内容や方法を具体的に提示していくためのバックアップ機能とは何か、バックアップ機能の質的検証作業を深めることが求められているといえる。また近年、支援者として、活用されることが期待されているホームヘルパー、あるいはガイドヘルパーなど、グループホームに所属する支援者以外の支援者との連携も含め支援構造研究を進めていくことを課題として認識しておきたい。これらの検証から、グループホームで展開される支援の実態が明らかになり、その支援内容が何かを明確に位置づけることに連動していけると考える。また、これらの検証の結果が知的障害という障害分野での支援構造として限定されることなく、たとえば、高齢期の人たちのためのグループホーム支援展開との共通的な論議も可能な視角を提供できる面を含んでいることも示唆されよう。

グループホームの支援が「普通のくらし」の支援と捉えられることによって、「支援実践」としての論議が弱められていることに留意する必要があろう。芝野松次郎が指摘する[9]実践理論・実践モデル・実践マニュアルによる実践理論システムの流れからするならば、地域生活支援の柱とされるグループホームにおける実践をめぐって、現場での経験を通した実践マニュアルや実践モデルの創出と修正開発の機会を設けなければならないだろう。

本研究成果には明治学院大学地域生活サポート研究会（代表　中野敏子）との協働研究とし

て取り組んだ内容も一部含まれる。今回のインタビュー調査をはじめ、これまでの調査研究にご協力いただいた方々に感謝申し上げる。なお、本研究成果の一部を日本社会福祉学会第52回全国大会のポスターセッションで報告した。

（中野　敏子）

【註】

(1) これまでの研究成果については、中野敏子他「知的障害のある人のグループホームにおける支援構造研究　Ⅰ」（明治学院大学社会学部付属研究所『研究所年報』第33号2003年３月 PP149－160）中野敏子他「知的障害のある人のグループホームにおける支援構造研究　Ⅱ」（明治学院大学社会学部付属研究所『研究所年報』第34号2004年３月　PP113－125）に報告した。

(2) 厚生労働省は2005年度から「障害福祉サービス法（仮称）」の導入を提案している。朝日新聞「障害者支援を一本化」2004年10月９日朝刊）および社会保障審議会障害者部会第20回「障害保健福祉施策の見直しの案について」資料（2004年10月12日）

(3) アクティブサポートモデルについては、エドウィン・ジョーンズ、キャシー・ロウ他著/中野敏子監訳・編『参加から始める知的障害のある人の暮らしー支援を高めるアクティブサポートー』（相川書房　2003年）でも検証を加えている。

(4) 前掲　中野敏子他「知的障害のある人のグループホームにおける支援構造研究　Ⅱ」の考察部分参照（笠原千絵　ＰＰ120－124）

(5) 調査に用いたビデオは、ウェールズ知的障害応用研究センターで1999年、普及版として作成され、作成者の許可を得て利用している。英国・ウェールズにおける日常的な生活場面のなかで、スタッフによる支援の提供について、その方法を解説したものである。主な流れは、①支援スタッフが日常の生活活動（掃除、食事つくり、選択、芝刈り、など）を支援している様子、②支援のスキルとして声かけなどそのレベルの違いを実際の場面の映像での説明、③支援スタッフが自分たちの支援内容を振り返るミーティングの様子である。なお居住者と支援者の「相互作用」は、ビデオで紹介される方法をただ用いれば成り立つわけではない。これらを通して、居住者にとって生活の質を高めるような関係をいかに生み出せるかが重要になる。

(6) 2003年度中の研究活動であったが、調査実施時期の調整として最終的に７月の実施まで延びることになった。

(7) 何をもって「障害が重度」と捉えるか議論が分かれるが、ここではニーズを表明する手段が極めて限られているという意味で用いている。

(8) ここでの「活動と支援計画」とは「毎日の生活を組み立て、そのなかで実際に活動への参加の場面を創出することに用いられる。具体的には、知的障害のある人が、何曜日のどの時間帯に、どのような活動をし、それに必要な支援を誰がどのように提供するのかについての、非常に具体的な計画である。どれだけ日々の活動への参加支援が行われたかをチェックすることが可能となり、定期的に支援を振り返り、計画と支援内容を評価することが容易となる特徴をもっている。」（浦野耕司（アクティブサポートモデルの支援枠組み）明治学院大学地域生活サポート研究会：中野敏子・浦野耕司・板橋さゆり「みずほ福祉助成財団助成研究報告　知的障害野ある人の地域生活と個別支援に関する研究―アクティブサポート・アプローチの応用性の検討―」2003年度日本社会福祉教育学校連盟年報所収〔2004年12月脱稿〕から）

(9) 芝野松次郎『社会福祉実践モデル開発の理論と実際』有斐閣　2002年　PP33－34